

調査は職場の異なる調査員が一時に集まれる唯一の期間である冬休みを利用した。1979年12月26日から翌年1月6日までの年末年始の全日程を調査にあてた。あいにく1980年1月2日から5日までは連日の雨模様であったが、調査は続行し、1月6日には埋め戻し、遺物梱包など全ての作業を無事終了した。

発掘調査地点は、鍬の深く入っていない貝層の残りの良い部分である地境を選んだ。発掘調査の許可を心よく承諾下された土地耕作者の根間亀吉氏（石垣市吉原字川平1,218）及び土地所有者の古波蔵永善氏（石垣市字登野城189）の両氏、交渉の際同行され御協力下された伊波寛氏、深石隆司氏には深く御礼申し上げる次第である。

（関口 広次）

## 第Ⅱ章 調査の内容

### 第1節 遺跡の概観

仲筋貝塚は沖縄県石垣市字仲筋の地籍に含まれ、石垣島北海岸の川平湾を望む標高40<sup>m</sup><sub>(1)</sub>前後の南から北へゆるやかに傾斜する砂丘上に位置している。現在の海岸線からの距離は直線で約400<sup>m</sup>ある（Fig. 1・2, PL. 1(1)）。貝塚は主として海水産の貝で形成された主鹹貝塚であり、約10×5<sup>m</sup>の楕円形の貝層が点在するいわゆる列点貝塚である。こうした小貝層は、われわれが調査中に確認したものとしては、県道川平・伊原間線の北側に1カ所、南側に3カ所あり、さらに県道南側に存在すると地元の方から聞いた1カ所（これはサトウキビ畑の中で結局確認できなかった）を含め、計5カ所を数える。現在、仲筋貝塚の一角は県道をはさんでカボチャ、カラシナ等の野菜やサトウキビの畑として利用され、そのために耕作による攪乱が著しい（Fig. 3）。

仲筋貝塚のすぐ北、川平湾に面した石灰岩の岩山から海岸にかけてのキシパラと呼ばれる一帯にも陶磁器、土器等が散布している（Fig. 2-2）。この遺跡の詳細は未だよくわかっていないが、その場所がちょうど仲筋貝塚から眼下に見下ろせる位置にあり、仲筋貝塚との関係を推測させる。

仲筋貝塚は早稲田大学によって確立された八重山考古学の編年では、外耳土器を主体とする多量の土器、陶磁器、鉄製品、石器、貝器、骨角器を出土する第Ⅲ期に位置づけられる。<sup>(2)</sup> この時期の遺跡は近年行なわれた分布調査の成果によると、石垣島の全遺跡数、85遺跡のうち半数以上の47遺跡にのぼる。<sup>(3)</sup> これらの遺跡のなかで発掘調査が行なわれ、その実態が明らかにされているものは5分の1程度であるが、ここではその代表的なものをあげておきたい。

まず、石垣島北部には、明治37年（1904）に鳥居竜蔵によって発掘された川平貝塚が

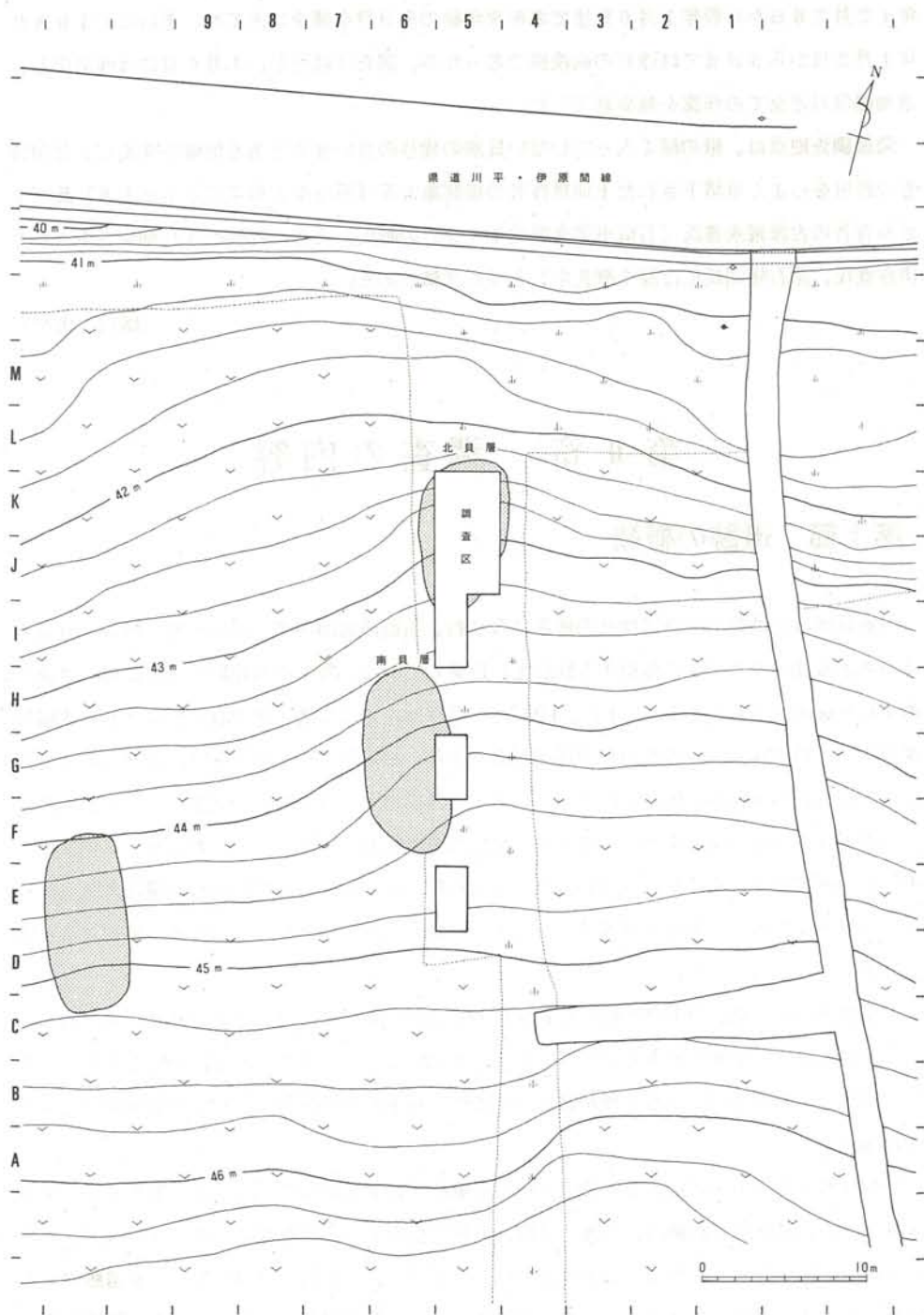


Fig. 3 仲筋貝塚付近地形図

ある (Fig. 2-3)。この発掘は沖縄の考古学的調査の最も初期に行なわれたもののひとつであるが、石器、貝器、土器、青磁等が出土し、鳥居は土器を外耳土器と命名した。<sup>(4)</sup> また、同じ北部には、昭和51・52年(1976・77)に青山学院大学によって調査されたヤマバレー遺跡がある (Fig. 2-4)。この調査では住居跡、鍛冶工房跡、石積遺構が検出され、14～16世紀中頃の集落の一端が明らかにされている。<sup>(5)</sup> ヤマバレー遺跡において検出された住居跡はサンゴ石灰岩塊を敷きつめて床としたもので、石垣島南部の山原貝塚(1959年、早稲田大学が調査)<sup>(6)</sup>、平得仲本御嶽遺跡(1975年、沖縄県教育委員会が調査)<sup>(7)</sup>、カンドウ原遺跡(1976・77年、石垣市教育委員会・沖縄県教育委員会が調査)<sup>(8)</sup> においても同種の遺構が検出されている。

石垣島北東部にはナガタ原貝塚があり、昭和53年(1978)に沖縄県教育委員会が調査しているが、遺物包含層は検出されず、遺跡の実態は未だ明らかではない。<sup>(9)</sup> また石垣島西部には名蔵湾に面する海岸から海底に広がるシタダル遺跡があり、多量の青磁・白磁・染付・南蛮陶器等が出土している。この遺跡は港もしくは沈没船、大量の荷こぼれによるものと推定されている。<sup>(10)</sup>

石垣島南部では、先にあげた山原貝塚、平得仲本御嶽遺跡、カンドウ原遺跡のほかに、フルスト原遺跡、芋若東遺跡、石城山遺跡がある。フルスト原遺跡は昭和51年(1976)に石垣市教育委員会によって調査されているが、<sup>(11)</sup> オヤケ赤蜂の居城址と伝えられる石積みの障壁、郭状の区画及び門址、墓、御嶽からなっている。芋若東遺跡は昭和52～53年(1977～78)にかけて沖縄県教育委員会によって調査され、ピットを検出、青磁・白磁・染付・南蛮陶器、土器、貝錘等を出土している。<sup>(12)</sup> 石城山遺跡は昭和52年(1977)に沖縄県教育委員会により調査され、青磁・南蛮陶器、土器、石器、骨器等が出土している。<sup>(13)</sup>

以上のように、八重山考古学の編年上、第Ⅲ期に相当する遺跡のうち、石垣島における発掘調査の行なわれたものを中心に述べてきたが、ほとんどの調査が遺跡の一部のみを発掘したものであるために、遺跡の全体像を復元するに至っていないのは残念なことである。また、この時期の遺跡はフルスト原遺跡、石城山遺跡、平得仲本御嶽遺跡のように台地上に営まれたものと、仲筋貝塚をはじめヤマバレー遺跡、ナガタ原貝塚、山原貝塚、カンドウ原遺跡、芋若東遺跡など低地に立地するものとに二分される。こうした現象が何に起因するかはさだかではないが、フルスト原遺跡のように権力者とのつながりを想定させる台地上の遺跡のありかたは、そこに当時の社会構造が反映していることを考えさせる。今後は個々の遺跡の実態を究明していくなかで、遺跡相互の関連とその社会的背景を考慮していく必要があるだろう。

(谷川 章雄)

#### 註

- (1) 国土地理院発行の1/50,000の地形図「石垣島」では仲筋貝塚の所在地の標高は約30mとなっているが、われわれが今回の調査において川平湾に面する1等水準点(3.13m)

からの水準測量で得た標高は40m前後と10m余の差が認められた。そのため、われわれは再度水準測量を行なったが、数値はほとんど変わらず、1/50,000の地形図「石垣島」が大正10年の測量をもとにしている点を考慮して、われわれの測量で得た標高を正しいものとした。

- (2) 滝口宏他『沖繩八重山』 1960年。
- (3) 当真嗣一他『石垣島の遺跡—詳細分布調査報告書—』 沖繩県教育委員会、1979年。
- (4) 鳥居竜蔵『有史以前の日本』 1925年。
- (5) 三上次男他『ヤマバレー遺跡発掘調査概報』ヤマバレー遺跡調査団、1977年。「沖繩・石垣島ヤマバレー遺跡第2次調査概報」『青山史学』6、1980年。
- (6) 註(2)に同じ。
- (7) 当真嗣一他『平得仲本御嶽遺跡発掘報告』 沖繩県教育委員会、1976年。
- (8) 知念勇他『カンドウ原遺跡発掘調査報告』 石垣市教育委員会、1977年。  
石橋新次他『カンドウ原遺跡緊急発掘調査ニュース(1977年度)』 沖繩県教育委員会文化課、1978年。
- (9) 岸本義彦他『ナガタ原貝塚・船越貝塚発掘調査報告書』 沖繩県教育委員会、1979年。
- (10) 大浜永亘・関口広次「八重山群島出土の古陶磁について」『物質文化』31、1978年。
- (11) 当真嗣一他『フルスト原遺跡』 石垣市教育委員会、1977年。
- (12) 大城慧他『筭若東遺跡緊急発掘調査報告』 沖繩県教育委員会、1978年。
- (13) 安里嗣淳他『石城山緊急発掘調査概報』 沖繩県教育委員会、1978年。

## 第2節 調査方法

前述のように(第Ⅱ章、第1節参照)、仲筋貝塚は貝層の点在する列点貝塚であり、しかも現在畑地として利用されているため、当初から耕作による攪乱が著しいことが予想された。したがって、畑の作物を荒らすことをできるだけ回避し、同時に耕作による攪乱の比較的少ないと考えられた県道南側の畑と畑の地境にある2カ所の貝層(各々を北貝層、南貝層と仮称する)を中心に調査区を設定することにした。調査区のグリッドは4m方眼とし、磁北より西へ15°の方向で地区割りし、任意に南から北へA~M、東から西へ1~9の番号をつけた(Fig. 3)。このグリッドに従って、まずE-5、G-5、I-5、K-5の西半分を発掘し、状況をみてこれらを適宜拡張することにした。その結果、J-5・K-5グリッドにあたる北貝層はほとんど攪乱を受けていないことが判明し、そこを集中的に発掘した。最終的な調査面積は55㎡である。また、これと並行して調査区を中心とした付近の地形測量を行ない、1/100、25cmコンタの地形図を作成した。なお、貝層の貝、獣骨、魚骨等のサンプリングは適宜行ない、とくに貝についてはG-5、K-5グリッドで任意の50cm四方のスポットを設けて柱状サンプリングを行